

Oracle® Database

リリース・ノート

10g リリース 1 (10.1.0.3) for Linux x86

部品番号 : B15529-04

原典情報 : B14145-05 Oracle Database Release Notes 10g Release 1 (10.1.0.3) for Linux x86

2006 年 3 月

このリリース・ノートには、今回のリリースのプラットフォーム固有または製品固有のマニュアルに記載されていない重要な情報が含まれています。

このリリース・ノートは、リリース後に更新される場合があります。このリリース・ノートの更新の確認と、製品固有のリリース・ノートの参照には、OTN-J の Web サイトのドキュメント・セクションを参照してください。URL は次のとおりです。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

製品固有のリリース・ノートについては、『Oracle Database プラットフォーム共通日本語 README』を参照してください。

このリリース・ノートは、次の項目で構成されています。

- [製品に関する注意事項](#)
- [ドキュメントのアクセシビリティについて](#)
- [サポートおよびサービス](#)

1 製品に関する注意事項

次の各項では、Oracle Database 10g および関連製品の注意事項について説明しています。

- Oracle Database のインストール、構成およびアップグレードに関する注意事項
- Oracle Transparent Gateway for DRDA のインストール
- Oracle Real Application Clusters に関する注意事項
- 必要な追加パッケージ
- Red Hat Enterprise Linux 4 の認定に関する更新
- その他の製品に関する注意事項

1.1 Oracle Database のインストール、構成およびアップグレードに関する注意事項

Oracle Database のインストール、構成およびアップグレードに関連する注意事項の詳細は、次の各項を参照してください。

- データベースのアップグレード
- Oracle9i Database から Oracle Database 10g へのアップグレード
- ディレクトリ権限が必要な extjob 実行可能ファイル
- 自動バックアップの有効化

1.1.1 データベースのアップグレード

カスタム・インストール・パスを選択し、旧バージョンの Oracle データベースがインストールされている場合、Oracle Universal Installer では、既存のデータベースをアップグレードするオプションがあります。既存のデータベースのアップグレードを選択した場合、Oracle Universal Installer では、初期データベースを作成するかどうかを確認する別の画面が表示されます。

初期データベースの作成を選択した場合、DBCA によって旧バージョンのデータベースが Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) にアップグレードされますが、初期データベースは作成されません。

1.1.2 Oracle9i Database から Oracle Database 10g へのアップグレード

Oracle9i Database から Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) にアップグレードする場合、タイムスタンプを使用した Oracle フラッシュバック機能が失敗します (Oracle Bug#3994270)。この問題を回避するには、Oracle Database 10g データベースから次の SQL コマンドを入力します。

```
SQL> DELETE FROM smon_scn_time WHERE orig_thread <> 0;  
SQL> COMMIT;
```

1.1.3 ディレクトリ権限が必要な extjob 実行可能ファイル

必須ライブラリを検索するために extjob 実行可能ファイルを有効にするには、\$ORACLE_HOME/lib ディレクトリおよびその親ディレクトリすべてに group および other に対する実行権限が必要です。

1.1.4 自動バックアップの有効化

システムに必要なフォントがインストールされていない場合、Oracle Database のインストール時に、「バックアップ・オプションおよびリカバリ・オプションの指定」画面が正常に表示されない場合があります。システムに固定幅フォントしかない場合、この画面の「バックアップ・ジョブの資格証明」エリアで、必要な情報を完全に指定できない場合があります。この問題を回避するには、この画面で「自動バックアップを有効にする」を選択しないでください。インストールの完了後、Oracle Enterprise Manager 10g Database Control を使用して、自動バックアップを有効にします。

1.2 Oracle Transparent Gateway for DRDA のインストール

Oracle Database リリース 10.1.0.3 では、Oracle Transparent Gateway for DRDA をインストールすると失敗します。この製品は、Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) のディスク 1/1 からインストールしないでください。かわりに、更新された CD パックに収録された Oracle Gateways 10g リリース 1 (10.1.0.3) for Linux x86 CD からインストールしてください。

この問題の詳細は、Oracle MetaLink のドキュメント 308396.1 を参照してください。

(Oracle Bug#4351017)

1.3 Oracle Real Application Clusters に関する注意事項

Oracle Real Application Clusters に関連する注意事項の詳細は、次の各項を参照してください。

- ノードを削除するための ASM インスタンス・クリーン・アップ・プロシージャ
- Oracle Real Application Clusters ソフトウェアのアンインストール
- stty コマンドにより発生する Oracle CRS インストール・エラー
- Oracle CRS のサイレント・インストール
- Oracle CRS および Real Application Clusters のインストール・ログ・ファイルのメッセージ
- NAS ファイル・システムでの Real Application Clusters データベースの作成
- 共有 CRS ホーム・ディレクトリまたは Oracle ホーム・ディレクトリの使用
- SLES 8 での CRS のインストール
- Real Application Clusters インストールにおける Network Attached Storage の使用
- Real Application Clusters シード・データベースで自動拡張されないリモート UNDO 表領域
- SUSE Linux Enterprise Server 9 での OCFS
- OPS リリース 8.1.7 から Oracle Real Application Clusters 10g へのアップグレード
- Oracle9i Real Application Clusters と Oracle Real Application Clusters 10g の使用

1.3.1 ノードを削除するための ASM インスタンス・クリーン・アップ・プロシージャ

ASM インスタンスを削除するには、ノード削除プロシージャにおいて、UNIX ベースのプラットフォームで次の追加手順を実行する必要があります。

1. この Oracle ホームからリスナー LISTENER_nodename をノードごとに実行している場合は、NetCA を使用してこのリスナーとリスナーの CRS リソースを削除します。必要に応じて、別の Oracle ホームにこのリスナーを再作成します。
2. この Oracle ホームから ASM インスタンスが実行されている場合、次のコマンドを入力し、ASM 構成を削除します。

```
$ srvctl stop asm -n node
$ srvctl remove asm -n node
```
3. ASM Oracle ホームにクラスタ・ファイル・システムを使用している場合、ローカル・ノードで次のコマンドを実行します。

```
$ rm -r $ORACLE_BASE/admin/+ASM
$ rm -f $ORACLE_HOME/dbs/*ASM*
```
4. ASM Oracle ホームにクラスタ・ファイル・システムを使用していない場合、Oracle ホームが存在する各ノードにおいて、前の手順にリストした rm コマンドを実行します。
5. +ASM で始まる oratab エントリを削除します。

1.3.2 Oracle Real Application Clusters ソフトウェアのアンインストール

CRS をアンインストールした後、次のコマンドを入力し、/etc システムの runlevel ディレクトリから CRS スクリプトを削除します。

『Oracle Real Application Clusters インストールおよび構成』の説明に従って、Oracle ホームおよび Oracle CRS ホームの Oracle Real Application Clusters ソフトウェアをアンインストールするには、インストールを実行したノードでインストーラを実行する必要があります。

CRS をアンインストールした後、次のコマンドを入力して CRS スクリプトを削除します。

```
$ $ rm -rf /etc/rc.d/rc*.*d/*96init.crs
```

1.3.3 stty コマンドにより発生する Oracle CRS インストール・エラー

Oracle CRS のインストール中、インストーラは SSH (使用可能な場合) を使用してコマンドを実行し、ファイルを別のノードにコピーします。インストール中、システム上のドット・ファイル (.bashrc または .cshrc など) に stty コマンドが含まれている場合、次のようなエラーが発生する場合があります (OracleBug#3414362)。

```
stty: standard input: Invalid argument
stty: standard input: Invalid argument
```

この問題を回避するには、これらのファイルを次のように変更して、STDERR のすべての出力を抑制することをお奨めします。

- Bourne、Bash または Korn シェルの場合：

```
if [ -t 0 ]; then
    stty intr ^C
fi
```

- C シェルの場合：

```
test -t 0
if ($status == 0) then
    stty intr ^C
endif
```

注意： SSHを使用できない場合、インストーラでは、ssh および scp のかわりに rsh コマンドおよび rcp コマンドが使用されます。リモート・シェルによってロードされる stty コマンドが含まれるドット・ファイルがある場合も、このエラーが発生する場合があります。

1.3.4 Oracle CRS のサイレント・インストール

Oracle CRS のサイレント・インストールを複数のノードで実行する場合、他の Oracle インストールが含まれていないシステムでは、インストーラによって Oracle インベントリが正しく設定されません。

この場合、インストールの完了後に、次の手順を実行します。

1. ローカル・ノードで `oraInstRoot.sh` スクリプトを実行します。
2. ローカル・ノードから各リモート・ノードに `oraInventory` ディレクトリをコピーします。
3. root ユーザーとしてログインし、各リモート・ノードで次のスクリプトを実行します。

```
oraInventory/oraInstRoot.sh
```

1.3.5 Oracle CRS および Real Application Clusters のインストール・ログ・ファイルのメッセージ

CRS および Real Application Clusters インストールのインストール・ログ・ファイルには、次のようなメッセージが含まれる場合があります。

```
/bin/tar: ../rootdeletenode: Cannot stat: No such file or directory  
/bin/tar: ../rootdelete: Cannot stat: No such file or directory  
/bin/tar: ../rootdeinstall: Cannot stat: No such file or directory
```

これらのメッセージはインストール上の問題を示すものではないため、無視して構いません。

1.3.6 NAS ファイル・システムでの Real Application Clusters データベースの作成

NAS ファイル・システムで Real Application Clusters データベースを作成するには、DBCA を対話型モードで実行する必要があります。DBCA を対話型モードで実行する手順は、次のとおりです。

- ソフトウェアのインストール時に次のいずれかのオプションを選択します。
 - 「Enterprise Edition」インストール・タイプを選択してから、「詳細」データベース構成オプションを選択
 - 「カスタム」インストール・タイプを選択
- ソフトウェアのインストール後、次のようにコマンドラインから DBCA を実行します。

```
$ $ORACLE_HOME/bin/dbca
```

DBCA を使用してデータベースを作成する場合、次のように、`FILESYSTEMIO_OPTIONS` パラメータに `directIO` という値を指定する必要があります。

1. DBCA に「初期化パラメータ」画面が表示されたら、「すべての初期化パラメータ」をクリックします。
2. 「拡張パラメータの表示」をクリックします。
3. `FILESYSTEMIO_OPTIONS` パラメータに `directIO` という値を指定してから、「閉じる」をクリックします。

1.3.7 共有 CRS ホーム・ディレクトリまたは Oracle ホーム・ディレクトリの使用

このリリースでは、Linux 上の共有 CRS ホーム・ディレクトリおよび Oracle ホーム・ディレクトリは、認定済の NAS デバイスに置かれている場合のみサポートされます。また、Oracle データベース・ファイルの格納にも NAS デバイスを使用する場合のみ、この構成がサポートされます。

注意： CRS ホーム・ディレクトリまたは Oracle ホーム・ディレクトリを OCFS ファイル・システムに置かないでください。

1.3.8 SLES 8 での CRS のインストール

SLES 8 システムで CRS をインストール中に、次のエラーが表示される場合があります (Oracle Bug#3433369)。

```
RKC-1038 : Error copying files listed in /tmp/OraInstall
date/installCopyFile.lst to node node_name
```

このエラーが表示された場合、ncompress-4.2.4-24.i386.rpm パッケージをインストールします。

1.3.9 Real Application Clusters インストールにおける Network Attached Storage の使用

Linux では、認定済の NAS デバイス上で Oracle ソフトウェアまたはデータベース・ファイルの格納に NFS ファイル・システムを使用できます。使用するファイル・システムのマウント・ポイント・パスは、すべてのクラスター・ノードで同じである必要があります。さらに、NFS ファイル・システムのマウント時に、次のマウント・オプションを使用する必要があります。

- noac オプションを使用して属性キャッシュを無効にします。
- tcp オプションを使用して TCP プロトコルを指定します。
- NFS ファイル・システムおよび正しいマウント・オプションがすべてのノードの /etc/fstab ファイルで指定されていることを確認し、各ノードのブート時にファイル・システムが確実にマウントされるようにします。

NAS デバイスおよび NFS ファイル・システムの使用方法に関する詳細は、次の資料を参照するか、ベンダーに問い合わせてください。

- 認定済の NAS デバイスの詳細は、Oracle Metalink を参照してください。
- Oracle Real Application Clusters とともに NAS デバイスを使用する際の特定の推奨事項は、NAS ベンダーに問い合わせてください。
- Oracle Database インストールに NAS デバイスを使用する際の一般的なガイドラインは、『Oracle Database インストレーション・ガイド for UNIX Systems』の付録 C を参照してください。

1.3.10 Real Application Clusters シード・データベースで自動拡張されないリモート UNDO 表領域

2つ以上のインスタンスを含む Real Application Clusters データベースを作成し、汎用データベース、トランザクション処理データベースまたはデータ・ウェアハウス・データベースを作成する場合や、データベース・ファイルに共有クラスター・ファイル・システムまたは自動ストレージ管理 (ASM) を使用する場合、データベース・コンフィギュレーション・アシスタント (DBCA) によって、初期サイズが 25MB の UNDO 表領域データファイルが作成され、ローカル・インスタンスでは AUTOEXTEND ON となりますが、リモート・インスタンスでは AUTOEXTEND OFF となります。

リモート・インスタンスの UNDO 表領域データファイルに対して AUTOEXTEND ON を設定するには、Real Application Clusters データベースを作成した後、次の操作を実行します。

1. DBCA を実行したノードにおいて、データベース・インスタンスに接続します。

```
$ sqlplus "/ AS SYSDBA"
```

2. 次のコマンドを入力し、リモート・インスタンスの UNDOTBS 表領域のデータファイル名を検索します。

```
SQL> SELECT file_name FROM SYS.DBA_DATA_FILES  
       WHERE tablespace_name LIKE 'UNDOTBS%' AND AUTOEXTENSIBLE='NO';
```

3. 前の手順で検索したデータファイルに対して AUTOEXTEND ON を設定します。

```
SQL> ALTER DATABASE DATAFILE datafile_name AUTOEXTEND ON;
```

1.3.11 SUSE Linux Enterprise Server 9 での OCFS

現在、OCFS は SUSE Linux Enterprise Server 9 ではサポートされていません。

1.3.12 OPS リリース 8.1.7 から Oracle Real Application Clusters 10g へのアップグレード

Oracle Parallel Server (OPS) リリース 8.1.7 を Oracle Real Application Clusters 10g にアップグレードする手順は、次のとおりです。

1. OPS リリース 8.1.7 データベースを Oracle9i Real Application Clusters リリース 2 (9.2) にアップグレードします。
2. Oracle9i Real Application Clusters データベースを Oracle Real Application Clusters 10g にアップグレードします。

注意： OPS リリース 8.1.7 データベースを Oracle Real Application Clusters 10g にアップグレードする場合、DBCA は使用できません。

関連項目： Oracle データベースのアップグレードの詳細は、『Oracle Database アップグレード・ガイド』を参照してください。

1.3.13 Oracle9i Real Application Clusters と Oracle Real Application Clusters 10g の使用

Oracle Real Application Clusters 10g と同じクラスタ・ノード上で Oracle9i Real Application Clusters を実行する場合、次の手順を実行します。

注意： 次の手順は、Oracle9i Real Application Clusters と同じクラスタ・ノードに Oracle Real Application Clusters 10g をインストールした場合のみ必要です。Oracle9i Real Application Clusters から Oracle Real Application Clusters 10g にアップグレードした場合は、次の手順を実行しないでください。

1. 次のディレクトリを作成します。

```
$ mkdir -p /etc/ORCLcluster/oracm/lib
```

2. ディレクトリを次のように変更します。

```
$ cd /etc/ORCLcluster/oracm/lib
```

3. `/oracle9i_home/lib/libcmdll.so` ファイルを現在のディレクトリにコピーします。

```
$ cp /oracle9i_home/lib/libcmdll.so .
```

4. 次のコマンドを入力します。

```
# ln -s ./libcmdll.so ./libskgxn2.so
```

5. 任意のクラスタ・ノードで、次のようなコマンドを入力し、すべてのクラスタ・ノード上のノード・アプリケーションを再起動します。

```
$ORACLE_HOME/bin/svrctl stop nodeapps -n nodename  
$ORACLE_HOME/bin/svrctl start nodeapps -n nodename
```

この例では、`$ORACLE_HOME` は Oracle Real Application Clusters 10g の Oracle ホームで、`nodename` はノードの名前です。クラスタ内の各ノードについてコマンドを繰り返します。

1.4 必要な追加パッケージ

Red Hat Linux 4 では、次のパッケージ（またはそれ以降のバージョン）がインストールされていることを確認してください。

```
gcc-3.4.3-9
make-3.80-5
binutils-2.15.92.0.2-10
compat-db-4.1.25
compat-glibc-2.3.2-95.30
setarch-1.6-1
```

注意： Oracle のデモをインストールするには、`openmotif-2.1.30-11` が必要です。

関連項目： Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) CD パックの Companion CD に付属している Oracle HTTP Server の使用を予定している場合は、Red Hat Enterprise Linux 4.0 で Oracle HTTP Server を使用する方法について、MetaLink のノート 315832.1 を参照してください。

SUSE Linux 9 では、次のパッケージ（またはそれ以降のバージョン）がインストールされていることを確認してください。

```
gcc-3.3.3-43
gcc-c++-3.3.3-43
glibc-2.3.3-98
libaio-0.3.98-18
libaio-devel-0.3.98-18
make-3.80
openmotif-libs-2.2.2-519.1
compat-2004.7.1-1.2.i586
```

1.5 Red Hat Enterprise Linux 4 の認定に関する更新

Oracle Database 10g リリース 1 (10.1.0.3) は、Red Hat Enterprise Linux 4 での使用が認定されています。Oracle Database 10g リリース 1 (10.1.0.3) を Red Hat Enterprise Linux 4 システムにインストールする場合、次の各項を参照してください。

- [インストール前に必要な追加手順](#)
- [Red Hat Enterprise Linux AS 2.1 \(Itanium\)、SUSE Linux Enterprise Server 9、Red Hat Enterprise Linux 4 での hugetlbfs の使用](#)
- [Red Hat Enterprise Linux 4 の場合のみ : hugetlbfs の使用または VLM ウィンドウ・サイズの調整](#)
- [Pro*C/C++ 構成ファイルの変更](#)
- [サポート対象の OCCI](#)
- [サポート対象外の OCFS](#)
- [サポート対象外の XDK](#)
- [サポート対象外の ASMLib](#)

1.5.1 インストール前に必要な追加手順

Oracle Database 10g リリース 1 (10.1.0.3) を Red Hat 4 にインストールする前に、次の手順を実行する必要があります。

1. 次の URL から OracleMetalink にログオンします。

```
http://metalink.oracle.com
```

2. OracleMetalink ページの端にある「Patches」をクリックします。
3. 「Select a Patch Search Area」ページの「Simple Search」をクリックします。
4. 「Search By」フィールドでパッチ番号を選択します。
5. 「Search By Patch Number(s)」フィールドで 4153257 と入力します。
6. 「Platform or Language」フィールドで Linux x86 を選択して「Go」をクリックします。
7. パッチ・ダウンロード・ページで「Download」をクリックします。
8. p4153257_10103_LINUX.zip ファイルをご使用のシステムのディレクトリに解凍します。
このファイルには、oraparam.ini ファイルが含まれています。
9. 『Oracle Database インストレーション・ガイド』の「インストール前のタスク」の章に記載されているタスクを実行します。
10. 次のコマンドを入力してインストーラを実行します。oraparam_path は、oraparam.ini ファイルのパスです。

```
$ ./runInstaller -paramFile oraparam_path
```

11. 『Oracle Database インストレーション・ガイド』の「インストール後のタスク」の章に記載されている必要なタスクを実行します。

1.5.2 Red Hat Enterprise Linux AS 2.1 (Itanium)、SUSE Linux Enterprise Server 9、Red Hat Enterprise Linux 4 での hugetlbfs の使用

『Oracle Database 管理者リファレンス』の「Red Hat Enterprise Linux AS 2.1 (Itanium) または SUSE Linux Enterprise Server 9 での hugetlbfs の使用」の項は、次の記述に置き換えてください。

Red Hat Enterprise Linux AS 2.1 (Itanium)、SUSE Linux Enterprise Server 9、または Red Hat Enterprise Linux 4 において、Oracle Database でラージ・ページ (Huge ページとも呼ばれる) を使用可能にするには、vm.nr_hugepages カーネル・パラメータの値を設定し、予約するラージ・ページ数を指定します。データベース・インスタンスの SGA 全体を保持するだけの十分なラージ・ページ数を指定する必要があります。必要なパラメータ値を判断するには、インスタンスの SGA サイズをラージ・ページのサイズで除算してから、結果の端数を切り上げて最も近い整数にします。

デフォルトのラージ・ページ・サイズを判断するには、次のコマンドを入力します。

```
# grep Hugepagesize /proc/meminfo
```

たとえば、/proc/meminfo にラージ・ページのサイズが 2MB とリストされ、インスタンスの総 SGA サイズが 1.6GB の場合は、vm.nr_hugepages カーネル・パラメータの値を 820 (1.6GB / 2MB = 819.2) に設定します。

1.5.3 Red Hat Enterprise Linux 4 の場合のみ : hugetlbfs の使用または VLM ウィンドウ・サイズの調整

Red Hat Enterprise Linux 4 で hugetlbfs を使用する場合、または VLM ウィンドウ・サイズを調整する場合は、プロセス当たりのロック・メモリーのデフォルトの最大サイズを大きくする必要があります。プロセス当たりのメモリーを増やすには、データベースの管理ユーザーが `oracle` である `/etc/security/limits.conf` ファイルに、次の行を追加します。

```
oracle soft memlock 3145728
oracle hard memlock 3145728
```

1.5.4 Pro*C/C++ 構成ファイルの変更

Red Hat Enterprise Linux 4 で Pro*C/C++ アプリケーションを構築する前に、次を実行する必要があります。

1. テキスト・エディタで `$ORACLE_HOME/precomp/admin/pcscfg.cfg` ファイルを開きます。
2. `sys_include` パラメータで、次のパスを検索します。

```
/usr/lib/gcc-lib/i486-suse-linux/3.2.2/include, /usr/lib/gcc-lib/
i486-suse-linux/3.2/include
```

3. 手順 2 で検索したパスを次のパスに置き換えます。

```
/usr/lib/gcc-lib/i386-redhat-linux/3.2.3/include
```

注意： システムに `postgresql-devel` パッケージがインストールされている場合は、Pro*C アプリケーションを構築する前に、`ORACLE_HOME/precomp/admin/pcscfg.cfg` ファイルの `sys_include` パラメータの先頭に `ORACLE_HOME/precomp/public` ディレクトリがあることを確認してください。

1.5.5 サポート対象の OCCI

Oracle C++ Call Interface (OCCI) は、現在 GNU C++3.2 での使用のみサポートされています。現在、Red Hat Enterprise Linux 4 では、OCCI は GNU C++ 2.96 または GNU C++ 3.4 での使用がサポートされていません。

1.5.6 サポート対象外の OCFS

OCFS は、現在 Red Hat Enterprise Linux 4 ではサポートされていません。

1.5.7 サポート対象外の XDK

XDK は、現在 Red Hat Enterprise Linux 4 ではサポートされていません。

1.5.8 サポート対象外の ASMLib

ASMLib は、現在 Red Hat Enterprise Linux 4 ではサポートされていません。

1.6 その他の製品に関する注意事項

その他の Oracle 製品に関する注意事項の詳細は、次の各項を参照してください。

- [自動ストレージ管理ライブラリ・ドライバ](#)
- [Net コンフィギュレーション・アシスタント・ヘルプ](#)
- [表のフラッシュバックまたはフラッシュバック分析](#)
- [Oracle Internet Directory](#)
- [韓国語で期間 SQL 実行計画を表示した場合のエラー](#)
- [Oracle Change Management Pack で使用できない Quick Tour](#)
- [グリッド機能](#)
- [表示されないネットワーク使用率メトリック](#)
- [PL/SQL のネイティブ・コンパイルでの Intel C++ コンパイラの使用](#)
- [PostgreSQL がインストールされている場合の Pro*C アプリケーションの構築](#)
- [Oracle Client ライブラリへのアプリケーションのリンク付け](#)
- [Sockets Direct プロトコル](#)
- [XDK デモンストレーション](#)
- [Pro*COBOL プリコンパイラのサポート](#)
- [Enterprise Security Manager のインストール](#)
- [Oracle Text による全文検索](#)
- [javassl の socketpair の作成](#)
- [Java デモンストレーションの実行](#)
- [Enterprise Manager のライセンス・マネージャ・エラー](#)

1.6.1 自動ストレージ管理ライブラリ・ドライバ

現在 Linux Itanium システムでは、SUSE Linux Enterprise Server 9 において、ASM ライブラリ・ドライバ (asm1ib) はサポートされていません。

1.6.2 Net コンフィギュレーション・アシスタント・ヘルプ

Net コンフィギュレーション・アシスタント (NetCA) ヘルプでは、「Oracle コンテキストの選択」ヘルプ・トピックへのリンクが壊れています。このトピックのテキストは、次のとおりです。

「ディレクトリ使用構成 - Oracle コンテキストの選択

Oracle 管理コンテンツが、このディレクトリの複数の場所に見つかりました。Oracle 管理コンテンツは Oracle コンテキストに格納されています。Oracle コンテキストは、ディレクトリ内の Oracle エントリが格納されるサブツリーです。

このコンピュータが Oracle エントリ (接続識別子など) にアクセスするデフォルトの Oracle コンテキストの場所として使用する場所を、リストから選択または入力します。」

1.6.3 表のフラッシュバックまたはフラッシュバック分析

あるユーザーが表のフラッシュバック操作またはフラッシュバック分析操作を起動し、このユーザーが FLASHBACK ANY TABLE 権限は持っていてもフラッシュバック対象のオブジェクトに対して特定のフラッシュバック権限がなく、DBA 権限を持たない場合は、次のエラーが発生する場合があります (Oracle Bug#3403666)。

ORA-02002: 監査証跡への書き込み中にエラーが発生しました。

ORA-00600: 内部エラー・コード、引数: [kzasps1], [4], [47], [], []

この問題を修正するには、SYSDBA として、FLASHBACK TABLE 文で参照されているオブジェクトに対する FLASHBACK 権限をこのユーザーに付与してから、フラッシュバック操作を起動します。次に例を示します。

```
SQL> GRANT FLASHBACK ON SCOTT.EMP_1 TO user1;
```

1.6.4 Oracle Internet Directory

このリリースには Oracle Internet Directory (OID) のクライアント・ツールが含まれていますが、OID のサーバー・コンポーネントは含まれていません。OID のサーバー・コンポーネントは Oracle Application Server 10g に含まれています。Oracle Database コンポーネントに OID サーバー・ツールが必要な場合は、Oracle Application Server 10g インストールからこれらのツールを実行します。

OID クライアント・ツールには、次のものが含まれています。

- LDAP コマンドライン・ツール
- Oracle Internet Directory SDK
- Oracle Directory Manager

OID のサーバー・コンポーネントには、次のサーバーと、これらを起動および停止するためのツールが含まれています。

- ディレクトリ・サーバー
- ディレクトリ・レプリケーション・サーバー
- ディレクトリ統合サーバー

1.6.5 韓国語で期間 SQL 実行計画を表示した場合のエラー

韓国語で期間 SQL の実行計画を表示すると、内部サーバー・エラーが発生します。これは韓国語に特有の問題であり、日本語または中国語では発生しません。このページを表示する必要がある場合、韓国語以外の言語でこの製品を動作させることが、現在唯一の回避策です。

1.6.6 Oracle Change Management Pack で使用できない Quick Tour

Quick Tour は Oracle Change Management Pack では使用できません。Quick Tour を実行しようとすると、エラーが発生します。

1.6.7 グリッド機能

Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) の『Oracle Database 新機能』には、Oracle Database 10g の最初のリリースで使用できない2つのグリッド機能、つまりレジナンスおよび透過的セッションの移行がリストされています。これらの機能は今後のリリースで使用可能になる予定です。

1.6.8 表示されないネットワーク使用率メトリック

Oracle Enterprise Manager Grid Control または Database Control では、各ネットワーク・インタフェースについて、次のネットワーク使用率メトリックが表示される必要があります。

- ネットワーク・インタフェース結合使用率 (%)
- ネットワーク・インタフェース読取り使用率 (%)
- ネットワーク・インタフェース書込み使用率 (%)

特定のネットワーク・インタフェースについてこれらのメトリックが表示されない場合は、`$ORACLE_HOME/sysman/config/network_speed` ファイルを作成し、このファイルにネットワーク・インタフェース名および速度を次のように入力します。この例では、`interface` はネットワーク・インタフェース名であり、`speed` は 1 秒当たりのメガビット数で表したインタフェースの速度 (Mbps) です。

```
interface_name speed
```

たとえば、`eth0` ネットワーク・インタフェースについてメトリックが表示されていない場合、`$ORACLE_HOME/sysman/config/network_speed` ファイルを作成し、次のように入力します。ここでは、100 はネットワーク速度 (Mbps) です。

```
eth0 100
```

1.6.9 PL/SQL のネイティブ・コンパイルでの Intel C++ コンパイラの使用

デフォルトでは、PL/SQL のネイティブ・コンパイルは、GNU gcc コンパイラを使用するように設定されています。gcc コンパイラのかわりに Intel C++ コンパイラ (icc) を使用するには、`$ORACLE_HOME/plsql/spnc_commands` ファイルに次の変更を加えます。

- gcc のコマンドをコメント・アウトします。
- icc のコマンドをコメント解除します。

1.6.10 PostgreSQL がインストールされている場合の Pro*C アプリケーションの構築

システムに `postgresql-devel` パッケージがインストールされている場合、Pro*C アプリケーションを構築する前に、`$ORACLE_HOME/precomp/admin/pcscfg.cfg` ファイルの `sys_include` パラメータの先頭に次のディレクトリを追加します。

```
$ORACLE_HOME/precomp/public
```

この変更を行わない場合、アプリケーションのリンク付けの際に、次のようなエラーが発生する場合があります。

```
/tmp/ccbXd7v6.o(.text+0xc0): In function `drop_tables':  
: undefined reference to `sqlca'
```

1.6.11 Oracle Client ライブラリへのアプリケーションのリンク付け

クライアント・アプリケーションが、リリース 2.2.4 以外の `glibc` を使用してコンパイルされている場合、このアプリケーションをクライアント共有ライブラリにリンク付ける必要があります。クライアント静的ライブラリの使用はサポートされていません。

注意： 次のファイルでは `libc` スタブは使用しないでください。

```
$ORACLE_HOME/lib/stubs
```

1.6.12 Sockets Direct プロトコル

Oracle Database 10g リリース 1 (10.1) の Oracle Net では、Red Hat Enterprise Linux AS 2.1 および 3 で InfiniBand ネットワーク・アーキテクチャを介した Sockets Direct プロトコル (SDP) がサポートされます。ただし、`$ORACLE_HOME/bin/adapters` ユーティリティには、SDP がサポートされていてもリストされません。

関連項目： Linux での SDP のサポートの詳細は、『Oracle Database 10g 管理者ガイド』を参照してください。

1.6.13 XDK デモンストレーション

XDK デモンストレーションを実行する前に、バグ 3821678 のパッチがインストールされていることを確認します。

1.6.14 Pro*COBOL プリコンパイラのサポート

Pro*COBOL プリコンパイラは、Red Hat Enterprise Linux 2.1 および SUSE Linux Enterprise Server 8 でのみサポートされます。

1.6.15 Enterprise Security Manager のインストール

Enterprise Security Manager (ESM) をインストールするには、Oracle Client をインストールして、「管理者」インストール・タイプを選択します。

1.6.16 Oracle Text による全文検索

Oracle Text による全文検索では、XML 表を手動で作成する必要があります。

XML 要素のコレクションに対するテキストベースの `ora:contains` 検索に Oracle Text の索引を使用する必要がある場合は、XML スキーマの注釈 `storeVarrayAsTable="true"` を使用しないでください。この注釈を使用すると、要素のコレクションが索引構成表 (IOT) の行として存続します。Oracle Text では IOT はサポートされません。

Oracle Text を使用して要素コレクションのコンテンツを検索できるようにするには、スキーマ登録時にパラメータ `genTables="false"` を設定します。次に、ORGANIZATION INDEX OVERFLOW 句を使用せずに、必要な表を手動で作成します。これらの表は、次の例に示すように、索引構成 (IOT) ではなくヒープ構成されます。

```
CREATE TABLE PurchaseOrder OF XMLTYPE
XMLSCHEMA http://localhost:8080/home/SCOTT/poSource/xsd/purchaseOrder.xsd
ELEMENT "PurchaseOrder"
VARRAY "XMLDATA"."ACTIONS"."ACTION"
STORE AS TABLE ACTION_TABLE ((PRIMARY KEY
(NESTED_TABLE_ID, ARRAY_INDEX)))
VARRAY "XMLDATA"."LINEITEMS"."LINEITEM"
STORE AS TABLE LINEITEM_TABLE ((PRIMARY KEY
(NESTED_TABLE_ID, ARRAY_INDEX)));
```

1.6.17 javassl の socketpair の作成

Oracle のアプリケーションで `javassl` を使用する場合、`createSocket()` メソッドを使用して `socketpair` を作成後、次の場合にシステムがハングすることがあります (Oracle Bug#3939624)。

- コンストラクタ `createSocket (String host, int port, InetAddress localAddress, int localPort)` で `localhost` が `String` の場合
- コンストラクタ `createSocket (InetAddress1, int, InetAddress2, int)` を使用している場合

この問題を回避するには、ローカルホストではなく完全修飾ドメイン名、IP アドレスまたは `127.0.0.1` を使用してください。

1.6.18 Java デモンストレーションの実行

Java デモンストレーションを実行する前に、CLASSPATH 環境変数 (/System/Library/Frameworks/JavaVM.framework/Versions/1.4.2/Classes) の設定で、classes.jar ファイルのあるディレクトリを含めます。

1.6.19 Enterprise Manager のライセンス・マネージャ・エラー

DB コンソールへのログイン時に、次のメッセージが表示される場合があります。

```
500 Internal Server Error
java.lang.NullPointerException
at oracle.sysman.emSDK.license.LicenseManager.hasAllPacks(
LicenseManager.java:467)
```

この問題を回避するには、sysman ユーザーで ORACLE_HOME/sysman/admin/emdrep/sql/empatch.sql スクリプトを実行します。(Oracle Bug#3880491)

2 ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/accessibility/> を参照してください。

ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

スクリーン・リーダーは、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかし一部のスクリーン・リーダーは括弧だけの行を読まない場合があります。

外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関する評価や言及は行っておりません。

Oracle サポート・サービスへの TTY アクセス

アメリカ国内では、Oracle サポート・サービスへ 24 時間年中無休でテキスト電話 (TTY) アクセスが提供されています。TTY サポートについては、(800)446-2398 にお電話ください。

3 サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

Oracle サポート・サービス

オラクル製品サポートの購入方法、および Oracle サポート・サービスへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/support/>

製品マニュアル

製品のマニュアルは、次の URL にあります。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

研修およびトレーニング

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

<http://www.oracle.co.jp/education/>

その他の情報

オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

<http://www.oracle.co.jp>

<http://otn.oracle.co.jp>

注意： ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

Oracle Database リリース・ノート, 10g リリース 1 (10.1.0.3) for Linux x86

部品番号 : B15529-04

原本名 : Oracle Database Release Notes, 10g Release 1 (10.1.0.3) for Linux x86

原本部品番号 : B14145-05

Copyright © 1996, 2006, Oracle. All rights reserved.

このプログラム (ソフトウェアおよびドキュメントを含む) には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段 (電子的または機械的)、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software—Restricted Rights (June 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかるとして使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性 (redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万が一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle、JD Edwards、PeopleSoft、Retek は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性があります。

このプログラムは、第三者の Web サイトへのリンク、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行 (製品またはサービスの提供、保証義務を含む) に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。